

目次

1. 自律性の効用 p2
2. 自律性と他律性 p2
3. 自律性とジャイロスコープ p2
4. 軸と枠 p3
5. 回転軸と枠の摩擦を最小化する方法 p4
6. ジャイロ対ジャイロの戦い p5
7. 回転を止めたジャイロ p6
8. 「ワ」という自律性が生み出すもの p6
9. 日本の組織における自律性 p7
10. 日本人の自律性は何によって獲得できるか p8

1. 自律性の効用

自律性とは簡単にいえば、ものごとを自分の考えで処理するという事に尽きる。自律と自立の違いは何かといえば、自立とは社会活動において生きるために自分に必要なものを自分で稼ぐことができるということであり、一方、自律とは、自立能力の基本の上で、世の中の様々な問題を、他人の言説に依存することなく自分自身の判断で切り開いていける能力のことを指している。簡単にいえば、 $3+5=0$ の答えを出せる能力が自立レベルであり、 $0+0=8$ の問題において、現在の状況下において最適な0を見出すことのできる能力が自律レベルであろう。

自律性は、困難な問題を解決する力をもつが故に、自分を救うのみならず他人をも救う力をもっている。世の中で、独創性があるとか創造的な仕事であるとかのことばで評価されるものの本質はみなこの自律性に源がある。

自律性の効用として次のようなものが挙げられるだろう。

◎困難な問題や未知の問題を解決する。

◎何の役にも立たない頑固さから解き放たれ、自己の心に自由性・柔軟性の光をもたらす。

◎自分の危機を救い、他人の危機を救い、集団の危機を救う。

◎行き詰った慣習を打破し、新たな創造的道を切り開く。

2. 自律性と他律性

自律性とは、「目前の問題を自分の目で観察し、それが意味することを自分の頭で判断し、それに対する行動を自分で選択し、自分で実行するということである」と言える。人の自律的な行動は、すべて四つのプロセス、すなわち「観察」「判断」「決定」「行動」によって構成されている。自律性とは、この四つのプロセスが自分自身によって行われている状態のことであり、他律性とは、他人や組織の影響に強く依存している状態のことである。

◎人間行動における四つのプロセス 「観察」⇒「判断」⇒「決定」⇒「行動」

◎自律性とは、自分自身による四つのプロセスの実行である。

◎他律性とは、他人や組織の影響に強く依存した四つのプロセスの実行である。

3. 自律性とジャイロスコープ

自律航法という言葉聞いたことがないだろうか。航空機や船舶において、その姿勢制御や目的地への航路の設定には、ジャイロスコープという装置が用いられている。ジャイロスコープは簡単に言えば地球ゴマの原理と同じものであり、自分の位置、すなわち角度や方向性の確認を可能とするものである。ジャイロスコープにおける「自律航法」の「自律」の意味することは、環境の変化によって自分の水平・垂直位置がどのように変化しても、ジャイロの回転軸は同じ方向を保つという特徴から命名されたものであろう。自分がどのように動き回っても、ジャイロの回転軸は水平を保ち、常に北を指し示している。ジャイロは常に自分自身を見失わないのであり、今自分が今どこにどのように位置しているのかを指し示す。上図は、いわゆる地球ゴマであるが、このゴマの外側にもう一つの自由回転枠を設けた仕組みがジャイロである。二つの枠の一つは、水平方向に回転可能であり、もう一つは垂直方向に回転可能な仕組みを備えている。



ジャイロ機構は、重くて高速で回転する円盤と、円盤を貫く両端が尖った軸および軸を受ける円形の枠の三つで構成されている。尖った軸は枠との摩擦を極小化するために必要であり、回転する円盤の慣性の力で軸が常に同じ方向を保つ性格を発揮させる。ジャイロにおける枠は、水平方向に自由回転する枠と、垂直方向に自由回転する枠の二つの枠構造によって、上下左右の全方向に

対して自由に回転できる機構をそなえており、それぞれ自由ジャイロ機構と呼ばれている。

このように空間における位置環境が変化しても常に一定方向を指し示す能力は、自律的なシステムの原点であるといえる。

◎ジャイロは、高速で回転する円盤と、円盤を貫く両端が尖った軸および軸受けである円形の枠で構成されている。

◎ジャイロの回転軸は、常に同一方向を向く自律性をもった仕掛けである。

4. 軸と枠

組織リーダーの第一の要件として”軸のぶれない人”という事が挙げられる。軸がぶれないということは、環境が順風であろうが逆風であろうが、その姿勢や考え方、行動が一貫していることを意味している。人や組織を取り巻く環境は常に千変万化しており、その状況が厳しければ厳しいほど目標を見失い、道に迷ってしまうものである。時は今まさに、グローバル化という国境の枠を越えた世界的な競争の時代であり、そのような激変の時代において最も必要とされる人間の素質は”軸がぶれない”ということであり、それを実現する性質は「自律性」に他ならない。

ジャイロの説明で触れたように、ぶれない軸は、高速回転する重い円盤と、枠との摩擦の少ない軸と、自由に回転する枠という三つの構造によって実現されている。中心軸をもつ高速回転する重い円盤を人間そのものに例えたとするならば、その枠は組織ないしは国家の枠組み、すなわち組織や国家の行動を統制する行動規範であると言える。

人間はその社会の枠組みと一体化した形で、生物としての自律性を保持する有機的なジャイロシステムであると言えるだろう。

人間は、個人における生きる情熱と高い能力を発揮することで自律性を増強させ、社会的な枠組み、すなわち適切な社会的な行動規範やルールによって、人間の自律性は一定の方向性を与えられるのである。

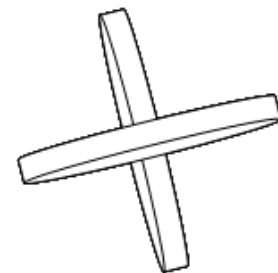
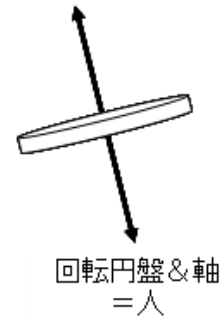
また、人間と社会的な枠組みとの間の摩擦を最小化することによって、人間の持つ自律性が最大限に発揮されることになり、垂直および水平に配置された二重の枠は、上下・東西南北いずれにも自由に回転可能なことによって、いかなる環境の変化に対しても、常に一定の方向性を保つ役割を発揮する。

これらのジャイロ的性質こそが個人の自律性を発揮させ、組織的枠組みおよび国家的な枠組み、すなわち日本人の信頼に値する行動規範が、人々の正しい進むべき道を指し示しているものと言える。このような人間社会的なジャイロシステムが、社会の永続的繁栄を実現する本質であると思われる。一方、自律性の低い人々、人間と社会的行動規範の間の摩擦が多い社会、歴史的経験則の積み重ねのない社会的な行動規範、などは人間社会の自律的能力を低下させ、ついには衰亡していく運命にあるものと思われる。

◎人間およびその社会は自律性を保持する一種のジャイロシステムである。

◎ジャイロにおける回転円盤と軸は、人間そのものに相当し、ジャイロにおける枠は、組織や国家の行動規範という枠組みに相当する。

◎自律性は、個人における生きる情熱と高い能力の発揮であり、それは人と組織行動規範の間の摩擦が少ないことによって最大化される。



5. 回転軸と枠の摩擦を最小化する方法

物と物がぶつければ必ず摩擦が生ずるように、人と人、人と組織、組織間、国家間においても、相互に関係性がある場合においては必ず摩擦が生ずる。欲と欲のぶつかり合いにおいては特に大きな摩擦が生じる。人間社会を円滑に運用するためには、この摩擦をいかに最小化するかということが必須の課題となる。一種のジャイロシステムである人間社会において、そのシステムの自律性を生かすも殺すも、回転体および軸である個人と、枠である組織規範ないしは社会規範との間の摩擦をどれだけ最小化できるかにかかっていると云える。個人と行動規範との摩擦の極小化は個人の自律性の最大化、ひいては組織の自律性の最大化の要であろう。

人間社会としてのジャイロシステムにおける、この摩擦係数の最小化は、欧米においては「契約文化」によって行われており、一方、日本においては「和の文化」によって行われてきたと言える。

西欧における契約の文化においては、個人間、組織間のゆるぎない信頼関係の担保となるものが契約であった。契約を破るということは、西欧においては神との約束を破ることと同義語であり、人としての存在を放棄するという他になかった。人々は契約を守ることでしか生きる道を許されなかったと言える。西欧における社会的なジャイロシステムにおける枠は、その宗教体系であり、宗教体系と個人を結ぶ役割を担ったものが「契約の文化」であると言える。

一方、日本における社会的なジャイロシステムの枠は、「和の文化」であったと言えるだろう。この「和の文化」は、数千年にわたって時代の試練に揉まれ、その中で取捨選択が行われた結果、時代の状況のいかにかわかわらず普遍性を持つものだけが残され、日本人の経験則として結晶化されたものであろう。この経験則は時の権力者など一部の人間が恣意的に作ったものではなく、連綿と続く膨大な数の祖先たちの、人生を生き抜く知恵の結晶体であり、その意味で全ての日本人によって作られてきたものであり、それ故に、鉄の律則とも呼ばれるような厳しい規範にも皆耐えられてきたのであろう。枠との摩擦を最小化する方法は、その枠自体を、その社会に生きる人々自身によって、その長い歴史の中で、その経験則の中から普遍的なものを選択し、作り上げることでしか達成されないであろう。目先の欲得によって一部の人間が恣意的に作ろうとしても必ず失敗するであろうし、その歴史に禍根を残す結果しかもたらさないであろう。

この結晶化された経験則が伝統的な行動規範と呼ばれるものの本態であろう。すなわち、日本における枠は、日本の伝統的行動規範であり、この行動規範もまた、連綿と継承され続けてきた神道・仏教・儒教という宗教の融合体なのであろう。

いずれにしても、洋の東西を問わず、人間社会という自律システムの枠は、人間自身が生み出した宗教あるいは思想によって構築されているのである。この枠を失った、すなわち自律性を失った人間は人でなしと呼ばれ、社会全体がこの枠を失えば乱世となるに違いない。

◎ジャイロ(自律)システムは、その枠と回転軸間の摩擦係数の最小化により、最大の自律性を発揮する。同様に、人間社会システムは、その行動規範という枠と人間との間の摩擦係数の最小化により、最大の自律性を発揮する。

◎摩擦係数の最小化は、欧米においては「契約文化」によって、日本においては「和の文化」によ



軸と枠(人と行動規範)間の摩擦の最小化

て実現されてきた。

- ◎日本社会システムにおける枠は、歴史的な経験則が集約された伝統的な行動規範である。
- ◎日本の伝統的な行動規範は、日本人自身によって作られてきた。それは人と、行動規範という枠の間の摩擦係数を最小化する役割をもつ。

6. ジャイロ対ジャイロの戦い

人間における個人戦ないしは組織戦は、あたかもジャイロ対ジャイロの戦いであるかのようである。この戦いの勝敗は明らかである。けんかゴマの勝負で勝つ方は、より重くかつ、より高速で回る方のコマの勝利である。これは戦闘勝利の法則である、「力の集中とスピード」が優った方が必ず勝利するという原則通りの結果である。

勝利を手に入れるためには、優れたジャイロシステムを構築しなければならない。単に力が強くても、単にスピードが速くても永続的な勝利を手にはできない。力の集中とスピードの両方を同時に実現するシステムはジャイロ的なシステム以外にはないと思われる。ジャイロ的なシステム構築の三つのポイントは次のようであろう。

- ◎自身の能力を磨くこと。
- ◎自分を取り巻く環境との摩擦を最小化すること。
- ◎累積洗練された経験則の枠の中で行動すること。

このことは、個人においても組織や国家においても共通の原理原則であるだろう。

ジャイロ対ジャイロの戦いは、自律システム同士の戦いである。人類の社会は、無数のジャイロシステムの集合体であるが故に、常に自律システム同士の衝突は避けられない。二つのジャイロシステム同士の摩擦を極小化する方法は、これらの二つを融合させて一つにするか、あるいは、これら二つのジャイロを更に大きな枠で囲み、新たな大きいジャイロを構成するかのどちらかであろう。これは、言葉を変えて言うと、二つの異なった文化を融合させ新たな一つの文化を構成する、あるいは、二つの文化の自律性を保持させたまま、新たな大きな文化ないしは思想の枠に属させるということになる。

異なった文化の融合の道を選んだのが、日本の文化であり、個々の文化の自律性を保ったまま、一神教という大きな枠の道を選んだのが、西欧の文化であり、大きな枠として思想イデオロギーをえらんだのが社会主義・共産主義の国家である。社会ジャイロシステムの自律性を保持するためには、ジャイロの重い円盤を回転させ続けるための巨大なエネルギーやその元である富が必要とされる。それぞれのジャイロは生き残りをかけて富やエネルギーの争奪戦を戦わざるを得ない状況に追い込まれる。このように出自と形態の異なるジャイロシステム同士が遭遇した場合、なかなか摩擦衝突は避けられないことが容易に分かる。二十一世紀の現代においても、世界中から戦争・騒乱・衝突がなくなる理由はどこにあるだろう。

- ◎日本的ジャイロ(自律)システムは、多文化融合型の枠を持つ。
- ◎西欧的ジャイロ(自律)システムは、一神教統合型の枠を持つ。
- ◎社会共産主義的ジャイロ(自律)システムは、単一思想統合型の枠を持つ。
- ◎巨大なジャイロ(自律)システムは、巨大なエネルギー(富)を必要とする。
- ◎型の異なるジャイロ(自律)システム同士の摩擦係数は非常に大きい。

7. 回転を止めたジャイロ

建設業・飲食業・介護産業・IT産業などにおいては、人手不足だと騒がれているが、これはその指導者たちが不況の時期に多くの勤労者たちを苛酷な環境で働かせ続けた結果が招いた当然の報いだと言わざるを得ない。苛酷な労働環境は、個人のジャイロシステムを破壊する。それは自律回転しているコマを無理やり外部の力で止めてしまうことと同じである。一度止まってしまったジャイロを復活させるには大きなエネルギーが必要になる。すなわち、一度、破壊された信頼関係は短期間では修復されないということである。すべて、人の道は商売であろうがなかろうが、「信なくば立たず」ということを忘れてはならないだろう。不足する人手を外国人労働者で穴埋めをし、同様の苛酷な労働環境下で働かせることをするならば、それらの労働者を派遣した国々の信頼を大きく損ねることになり、二重の罪を犯すことになるということ認識する必要があるだろう。

今、日本国中のあちこちで多くのジャイロが止まってしまっており、日本国という大きなジャイロもその自律性保持が揺らいでいるように思える。所属する弱小のジャイロを振り落とすことで大きなジャイロの自律性を保持させようとしても無理であろう。なぜならば、その社会ジャイロシステム全体の枠である日本の伝統的行動規範が破壊され続けており、ジャイロ内およびジャイロ間の摩擦係数を極大化させており、個人および組織の自律性を喪失させ続けているからである。

大多数の中小企業を切り捨て、一部の大企業だけを復活させる方法では日本の復活は達成できないだろう。もしも80%のジャイロ(人や中小企業)が止まってしまったなら、残りの20%のジャイロ(富裕者や大企業)が80%の富を保有していたとしても日本の社会は機能しなくなるだろう。なぜなら、人の世を動かすものは人自身であり、富ではないからである。もしそうでないと思うなら、徹底的に自分の組織で試してみればよく分かるであろう。

◎人々の心や体の中にあるジャイロ(自律性)を止めてはいけない。

◎人々のジャイロ(自律性)の崩壊は、即、組織および国家のジャイロ(自律性)の崩壊となる。

8. 「ワ」という自律性が生み出すもの

ジャイロとはもともとギリシャ語のgyrosであり、英語ではcicleである。これらの言葉は、円、環(ring)、循環(cycle)などの意味をもっている。これらのキーワードが指し示すものは永久運動であり、永続的繁栄であるように感じられる。すなわち自律性こそが個人ないしは組織の永続的繁栄を実現させる性格特徴であるのかも知れない。

これらのキーワードの共通する言葉、すなわち「ワ」から想起されるものには、例えば日本人が最も大切にしてきた「和」というものがある。この「和」は、人の和であり、すなわち人々が円形に手をつないだ「環」であるといえる。この「和」はいつも期待を裏切ることなく、日本人に生きるための最強の力を与えてくれた。それゆえに「和をもって貴しとなす」なのである。

また上代の日本人の集落は環濠集落という環の中で生活をしてきた。これもまた「環」であった。この丸い掘割で囲まれた集落は、外敵からの防御のために大きな力を発揮し、さらに人々の生活の利便性も極めて高い生活様式であったといえる。円形の陣は最大の防御および攻撃の隊形である。「和」を単なるなかよしクラブのなれあいなどと勘違いしてはいけないだろう。「和」というジャイロシステムにおける枠組みは、鉄の律則とも呼ばれた、日本の伝統的な行動規範であったということ忘れてはならない。

また繰り返されるサイクルである循環に関しては、すでに『循環再生の法則』で詳述したが、ノウハウや資産の広範囲にわたる社会的継承循環こそは、間違いなく個人および組織・国家の復興復活を実現し永続的繁栄をもたらす具体的な方法であろう。

また、「輪」はいたるところで人類の文明の利器に応用されている。身近なところでは、自転車や

自動車、電車など地上を走る乗り物はすべてこの「輪」に依存している。またブルトーザーや戦車における駆動輪は無限軌道と呼ばれており、どのような悪路も乗り越える力を発揮している。これらの「輪」を支える最小の部品はボールベアリングと呼ばれており、その真球作成の技術はすべての物理的に動くものの根幹技術となっている。

「ワ」は摩擦を最小化し、最小のエネルギーで最大の運動効果を生み出す源である。

「ワ」と発音される原日本語は、「和」「環」「輪」のみならず、古代日本の国を表すことばも「ワ＝倭」であり、自分自身を表すことばも「ワ＝我」であったことは、あながち偶然でもなく、単なることば遊びでもないように思える。

ジャイロ→自律航法→円・環・循環→自律運動・循環運動・永久運動・無限軌道→日本における「ワ」「和」「環」「輪」→自律性、と言う流れでイマジネーションを膨らませてきたが、「自律性」の性格特徴は、実に深く広範囲な意味をもっていると言える。

◎「ジャイロ gyros」は「ワ」すなわち、円、輪、環、循環を意味する。

◎「ジャイロ」＝「ワ」は、自律的な永久無限運動すなわち永続的な繁栄の根源である。

◎「和」は、いつも期待を裏切ることなく、日本人に生きるための最強の力を与えた。

◎円形の陣は、最大の防御および攻撃の隊形である。

◎ノウハウや資産の社会的継承循環こそが永続的な繁栄をもたらす。

◎「ワ」は摩擦を最小化し、最小のエネルギーで最大の運動効果を生み出す源である。

9. 日本の組織における自律性

従来日本の組織は、会社という運命共同体という枠の中で、個人に生存の保障を与える反対給付として、会社に対する忠誠心を求め、それによって力の集中を高め競争力を維持してきた。この相互義務的な行動規範が組織と個人の間の摩擦を最小化し、組織としての自律性を実現してきたと言えるであろう。この日本的運命共同体においては、個人は自律性よりも組織に対する忠誠心を求められ、個を空しくし全身全霊をもって組織のために働き、組織があたかも一人の人間であるかのように自律性をもって行動してきたのである。グローバル競争によって終身雇用や年功序列などの保障の枠組みが既に崩壊してしまった日本の組織が今後生きる道は、新たな行動規範の枠組みを全員で再構築し、個人における新たな自律性の獲得に求めるしかないであろう。

自律軸の自由性を可能にする仕組みは、その軸を支える支点であり、支点を与える枠に他ならない。現在の日本は「枠」を失った状態にあるのかも知れない。すでに個人における「生存権を保障する枠」、組織における「集団を統率するための忠誠心という枠」、国家における「富国平等社会実現という枠」は大きく傷ついてしまった。欧米における枠は、キリスト教を基盤とした契約文化的自由平等の思想であり、中国・ロシアにおける枠は、共産主義思想に基づく富の共有分配思想であろう。これらの枠は現在でも、彼らの国家において国民の力を結集させる強力な「枠」として機能している。

枠がなければ力の結集とスピード性の確保は実現できない。枠がないということは、拡散あるは放任ということである。これを自由とは言わないだろう。枠との摩擦が多ければ不自由であり、枠との摩擦が少ない状態を「あるべき自由」と言っても良いだろう。

日本の個人・組織・国家が今までの「枠」をすべて放棄してしまったなら、強力かつ高速な枠をもつ他国との競争に勝てる見込みはほとんどないと言っても過言ではないだろう。

グローバル競争で国家間の境界がなくなったように言われているが、あくまでも経済的境界が低くなったただけのことであり、国家の境界は厳然として存在しており、領有権問題はあちこちで国家間の紛争の原因となっており、強力な枠組みをもった国が”確信的な自国の権利”とかの言い方で他国を圧迫し続けている。

我々は、他国と対抗できる新たな枠組みの構築を急がなければならない。一つ目の枠組みは会社組織における枠組みであり、二つ目の枠は国家における枠組みである。その枠組みは、日本の伝統的な行動規範の内の「相互義務の履行」に求めるべきであり、さらにそれを西欧的宗教思想によらない日本的な新たな「契約思想の構築」にまで進化させる必要があるだろう。それと同時に、個人においては「自律性の獲得」を目指す必要があるだろう。

◎日本の社会ジャイロシステムは、保護の付与に対し忠誠心で応えるという相互義務的な行動規範が組織と個人の間の摩擦を最小化し、組織としての自律性を実現してきた。

◎「枠」を失うことは、即自律性を失うことであり、他のジャイロシステムとの競争に必ず敗北する。

◎日本の新たな枠は、伝統的な行動規範の「相互義務の履行」に求めるべきである。

◎日本人は、伝統的な「相互義務の履行」を「日本的契約思想」にまで発展させる必要がある。

◎日本人は、「自律性の獲得」を目指す必要がある。

10. 日本人の自律性は何によって獲得できるか

欧米人においては、その宗教文化を母体とした契約文化が個人および組織の自律性を育成してきた。日々の生活におけるあらゆることが契約に基づいて執り行なわれる社会においては、個人は常にそのものごとにおける直接的な当事者としての立場から逃れることは許されず、その契約に関して常に「自分の目で観察し」「自分の頭で判断し」「自分で意志決定し」「自分で実行する」しか道はないのである。すなわち自分の自律性の発揮を行うしか方法はないのである。このことができない人間は、欧米社会では直ちに落伍者となってしまう。

一方、日本においては、組織の能力の強化が最優先価値とされ、個人の自由な行動を規制し続けてきた結果、個人における自律性は組織集団という枠を越えない範囲の中でしか発揮することが許されなかった。その意味で日本人における自律性は、西欧的な観点から見た場合、本来の自律性とはほど遠いものになってしまった。

他人の意見や感情を異常なまでに気にすること、上司の命令は絶対的なものとして柔順に従うこと、会社の方針を無批判に丸呑みすること、お上の指示は常に「ご無理ごもつとも」と受入れてしまうこと、これらの思考・姿勢・態度は自律的とは言えない。

このような日本共同体には個人の自律性がまったく育っていないのであろうか。日本の会社組織は、個人的な行動に厳しい規制をかけてきたが、一方、その共同体の枠をはみ出さない範囲では個人の自由な行動を許してきた歴史をもっている。戦後の日本においては、組織の枠を守らなければならなかったために、世界的な大発明は数少ないが、中あるいは小の発明に限って言えば世界に誇れる数と質の特許発明を生み出したのである。そこには枠の規制の中にあっても、嬉々として創意工夫を楽しむ日本人の姿を見ることができる。全国的に普及したQCサークルは、残業代のない終業後の時間であったにもかかわらず、多くの人たちは熱心に改善活動に取り組んでいたものである。このことは、多くの日本人は単に目先の利益やインセンティブで行動するのではなく、将来の安心が保障される枠組みの中であったなら、個人の自律性の発揮を十分に行うであろうことを示している。

将来の安心とは、経済的成長が約束されるということと同義語ではないだろう。貧乏なら国民みな貧乏で公平であり、貧乏でも能力のある者には進むべき道が用意されているような機会均等の社会の枠組みならば、国民はみなその自律性を発揮し、個人も組織もいきいきとするであろう。戦後、数十年間の日本人は、みな自分の所属する組織を信頼し、組織も個人に対して配分の公平感を守り、お互いの信頼関係の中で、その生涯を共に生き抜いてきたということを忘れてはならないだろう。当時の日本人たちは所得倍増を目指して仕事に励んだわけではなく、結果として所得が倍増したのである。貧乏でもみな幸福であった時代もあったのである。

指導者の最も重要な仕事は、大勢の部下に希望という光を見せることにあろう。光明という光は人々に大きな安心感を与え、個人における自律性を大いに喚起するだろう。

しかしながら現実の社会においては、公平社会は格差社会となり、機会均等は有名無実となり、組織と個人間の信頼関係は希薄となり、人々は連帯感を失い孤立化しており、日本の社会における伝統的な枠組みは著しく損傷していると言わざるを得ない。そのような状況下において、まず我々個人がとるべき対応は、現在の毀損されている枠から一旦離れることが必要であろう。不条理・不道德・非合理的な枠組みは、個人という自律的な回転ゴマを激しい摩擦によって停止させてしまう。その摩擦によって生じる高熱は、生身の生物である人間を焼き殺していることにも例えることができるだろう。信頼に値しない枠であるならば、我々は信頼に値する日本の伝統的な行動規範に拠って新たな自分の枠を形成しなければならない。自分および自分が影響力を行使できる範囲において新たな枠の構築を急ぐべきである。社会が変わることを待っているような他律的な態度では、新たな枠はいつまでたっても手に入れることはできないであろう。

自己の自律性の確立に必要なことは下記のようなようであろう。

【個人の自律性復活の要点】

- ◎自分の目で観察し、自分の頭で判断し、自分の意志で決定し、自ら主体的に行動すること。
- ◎契約思想に基づく仕事・業務の遂行
- ◎なんととしてでも生き抜くという情熱とプライドの喚起
- ◎自己の能力の練磨
- ◎他人との連携・連帯
- ◎自己の保有するノウハウの他者への継承

さらに組織の自律性の復活に必要なことは下記のようなようであろう。

【組織の自律性復活の要点】

- ◎日本人における未知・新奇なるものに対する好奇心は、自律性を復活させる。
- ◎機会均等な社会システムの構築は、自律性を復活させる。
- ◎ノウハウや資産の広範囲にわたる継承循環は自律性を復活させる。
- ◎指導者の役割(リーダーシップ)とは、傘下の人々に無理を強いることではなく、人々に将来の展望や夢という光をあて、それによって自律心を喚起することにある。
- ◎「強きも、弱きも、共にこの世を生き抜く」という連帯感は自律性を復活させる。
- ◎新たな「相互義務の履行」システムの構築は、新たな自律性を喚起する。
- ◎多くの異なった価値観を統合可能にすること、すなわち多種多様な個々のジャイロシステムの自律性を保ったままで、すべてそれらを統合ないしは融合するためには、更に大きな社会的ジャイロシステムの構築が必要である。